

学生による地域交流のためのイベント：  
新所沢団地自治会イベント参加報告

中西 希和

Events for community exchange by students.  
—Participation report of events hosted by resident's association in  
Shin-Tokorozawa.

Kiwa Nakanishi

## はじめに

イベントは、社会的なコミュニティ活動、地域的なコミュニティ活動を活性化していくための効果的な手段として注目され、実施されている。

秋草学園短期大学文化表現学科では、これまで「プレ・ボランティア」や「ボランティア活動」等の授業を通して、新所沢団地自治会開催のコミュニティサロン「ぐりーんぽけっと」でのボランティア、秋祭り、さくら祭り、花壇の花植えなどの様々なイベントに参加し、自治会や団地住民の方々との交流を図ってきた。

本稿では、その中から平成28年3月のさくら祭りに参加したロゼットづくりのワークショップ「秋草学園短期大学によるワークショップ ロゼット作り」、平成28年6月～7月にかけてコミュニティサロン「ぐりーんぽけっと」に季節を感じさせる飾りつけとして行った七夕リース制作を取り上げ、学生と住民の交流のためのイベントについて考える。

## 1. コミュニケーションとイベント

### 1-1. イベントについて

イベント (event) とは、「催し。行事。運動競技の種目。試合。」<sup>1)</sup>とあり、一般的には主に行事や催し、催事といった意味で使われている。旧通商産業省の「イベント研究会」で策定されたとされる定義によれば「イベントとは、何らかの目的を達成するための手段として行う行・催事である」<sup>2)</sup>とあり、また、一般社団法人日本イベントプロデュース協会 (JEPC) は「イベントは何らかの目的を達成するための手段として開催される直接的なコミュニケーションメディアである」<sup>3)</sup>とイベント憲章を掲げている。社団法人日本イベント産業振興協会 (JACE) によれば、イベントの必須条件として「非日常性」、「目的の存在」、「場の創出」、「コミュニケーション表現・行為」、「計画性」が必ず備わっており、イベントとは「非日常的な目的のために、非日常的な場とコミュニケーション表現・行為を計画的に作り出すこと」<sup>4)</sup>としている。多くのイベントは、人々に何かを知ってもらいたい、理解されたいという目的を果たすためのコミュニケーション手段、メディアとして、開催されている。そしてイベントが持つ機能の1つであるコミュニケーション・メディア機能は、人と人、人とモノ、人とコト等をつなぎ、他のメディアと比較すると「直接的」で「双方向」的メディアとしての特性を持っているとされている<sup>5)</sup>。

### 1-2. 地域イベント

地域イベントも様々な目的を達成する手段とし、住民が参加することにより実施されるが、計画や実施等の段階において関係機関や住民が協力し合うことでコミュニケーションが活発になり、互いの理解が深まるという効果が期待されている。学生による地域イベントの場合、学生と住民による世代間交流を期待することができる。世代間交流により、学生は地域や住民を理解したり、互い

に人間関係の中から多くのことを学ぶことができ、また高齢者の孤立を防ぐことも期待されている。こうした地域イベントによる大きな効果を期待し、新所沢団地自治会のさくら祭りというイベントに参加することになった。

イベントの本当の目的は学生と住民の交流であるが、交流することのみを目的とすると普段接点のない者同士でコミュニケーションを取ることは非常に難しい。ものづくりを通して作り方を教え、教わりながら1つのものを一緒に完成させるという目的があれば自然と会話も生まれ、コミュニケーションを取りやすくなると考えられる。

そこで、ロゼット作りのワークショップを開き、学生が住民の参加者に作り方を教え、参加者が作品を完成させるのを手伝いながら地域交流を図ることにした。

## 2. 「秋草学園短期大学によるワークショップ ロゼット作り」

### 2-1. ロゼットについて

#### 2-1-1. 17世紀のロゼット

現代において「ロゼット (rosette)」というと、平たくブリーツを折ったりリボンを円形状にし、勲章のように中央にモチーフがあり、テール部分がある形で胸元やバッグ等につけるアクセサリを思い浮かべるが、「ばらの花のようにアレンジした飾り。普通、リボンのループを立てたり、平たくしたりして、きまった形につくる。17世紀に靴の飾りに用いた。」<sup>6)</sup>とあるように、ファッションの歴史の中では17世紀頃に見られるリボンで作られた、円形のバラの花のような装飾がロゼットと呼ばれる。ばら結びとも訳される。

リボンは16世紀にアクセサリの種類が増え、大きさが大きくなった際、レースとともに登場したとされる。17世紀は男性の方が女性よりも服装が華やかであり、リボン飾りは男性のファッションに多く見られ、17世紀前半の男性の靴の甲や靴下が落ちるのを防ぐためにつける靴下留めに大きく立体的なロゼットが着用された(図1)。17世紀後半になると上半身には裾丈や袖丈の短いプルポワン(上衣)、下半身には襷を多くとり、スカートのように見えるキュロットである、ラングラヴを着用したが、上着の裾や袖、ラングラヴの裾等プリンジ状のリボン飾りが多く取り付けられた。

18世紀になると女性のファッションが華やかになり、使用されるリボンの結び方は蝶結びが一般的となる。男性の脚につけられていたリボンの装飾は見られなくなり、女性の髪飾り、ドレスや胸当て、帽子の装飾等にリボンが多く見られるようになる。

#### 2-1-2. 帽章のコカルド

一方で、コカルド(cocarde 仏語)とは「階級章、会員章として帽子につけるバラの花飾り」<sup>7)</sup>であり、17世紀にリボンのコカルドが帽子につけられていたとされる。現在のロゼットのデザインにはこのコカルドの影響が強く見られる。コカルドはフランスでは円形状にしたリボンを軍の帽

章として帽子につけられ、1701年に起こったスペイン継承戦争では赤色と白色、1756年の七年戦争では白色と緑色が使われたが、1767年に正式なコカルドの色が、ブルボン朝の象徴である白百合に由来する白色に決まったとされる。アメリカでは1775年の独立戦争の際に植民地軍はハノーヴァー朝のシンボルである黒のコカルド（英語ではコケード）が使われ、その後軍の階級別に色が制定されたが、独立戦争後にアメリカ合衆国が誕生すると、帽章として黒色のコカルドが正式に採用された<sup>8)</sup>。

1789年のフランス革命後、革命派のファッションとして下層階級の長ズボン、カルマニョル（ジャケット）、サボ（木靴）と合わせて赤、青、白色の3色のコカルドを付けた帽子を被るという服装が現れる（図2）。フランス国旗の由来でもあるこの3色はパリ市の色である赤と青、そこにブルボン朝の白を加えた、パリ市民と王家の和解を意味する色であり、トリコロールと呼ばれるようになってフランスの人々が服装に取り入れるようになった。このコカルドはアメリカにも伝わり、「ロゼット」に変化していくきっかけになったとされる。

### 2-1-3. コカルドからロゼットへ

フランスではコカルドという名称はそのままに、形を発展させていくが、イギリスではコカルドにロゼットという名称がつけられるようになる。1840年、ヴィクトリア女王はアルバート公との結婚式の際、白い絹サテンと国産のホニトン・レース（ボビン・レース）で仕立てられたウェディング・ドレスを着用した。

この結婚式でヴィクトリア女王のブライズメイズを務めた女性たちにターコイズで作られた鷲のブローチが贈られた。このブローチを受け取った女性の後年の肖像画にはブローチがロゼットとして胸に飾られている。この頃から白いロゼットが登場し始め、ロイヤルウェディングの象徴になったとされる。1863年のアルバート・エドワード皇太子とデンマークのアレクサンドラ妃の結婚式では、ホニトン・レースと、コヴェントリー市のリボンが注目を集め、コヴェントリーの白いリボンを使ったロゼットは中央のモチーフに皇太子“プリンセス・オブ・ウェールズ”の紋章である羽根を織り込んだり、徽章が付けられた。その他、無地のリボンで作られたものや、2人の顔がテールに織り込まれたものなど様々なデザインのものが作られ、人々が胸に付けて結婚を祝福した。こうしてロゼットは幸せを祝福する象徴として広く行き渡っていくことになる（図3）。

アメリカでは、南北戦争の頃からロゼットと呼ばれるようになり、エイブラハム・リンカーン大統領が暗殺された際、哀悼の意を示すための喪章として、黒いリボンのモーニングロゼット（mourning rosette）が作られた。19世紀後半になると、バッジのメーカーでロゼットが作られ、メダルなどととも広まっていくようになる。イギリスでは1860年頃からホース・ショーでロゼットが見られるようになり、家畜の品評会やドッグショーなどで優秀な賞をとった動物たちに贈られるようになる。20世紀に入ると選挙や女性参政権の象徴として使われるようになる。また、ミシンが発達したことにより、細かく立体的なプリーツが作られるようになり、ロゼットのデザインの種類が増えていくことになる<sup>9)</sup>。イギリスでは現在でもイベントや記念日等にはロゼットが製作さ



図1 ロゼットで靴の甲が飾られている。  
(ウィリアム・ラーキン「リチャード・サックヴィル第3代ドーセット伯爵」1613年)



図2 革命派のファッション。赤、青、白色の3色のコカルドを付けた帽子を被っている。  
(ルイ＝レオポルド・ボワリー「サン・キュロットの服装をした歌手シュナール」1792年)



図3 1863年に作られたコヴェントリーのロゼット。モチーフに皇太子の紋章である羽根の刺繍が施されている。  
(出典：WHYTROPY 著、『ロゼット リボンの勲章をさがして』、双葉社、2015年、p32)



図4 「秋草学園短期大学によるワークショップ ロゼットづくり」の参加者の様子。



図5 コミュニティサロン「ぐりーんぼけっと」に飾ったセタリース。

れ、販売されている。

## 2-2. ワークショップでの制作方法

ワークショップでは、気軽に参加できること、完成させること、帰宅後にも1人で作ることができること、を重視することとした。ワークショップは学生が中心となり、有料（材料費100円）で参加者に作り方を教え、制作して頂く。ロゼットはリボンでプリーツを作り、針と糸を使用して縫って作る方法が一般的である。しかし、屋外でのワークショップであるため、照明等はなく、天候によっては手元が暗くなり、良く見えない場合もある。また、ワークショップを行う場所が新所沢団地内であるため、参加者は団地住民が多く、参加者層は小学校入学前の子どもから高齢者までと幅広くなる可能性がある。したがって、ロゼット制作は縫うなどの非常に細かい技術は必要とせず、10分から20分程度で比較的容易に完成させることのできる制作方法が望ましいと考えた。制作方法はコクボマイカ著『縫わずにできる すてきなロゼット』<sup>10)</sup>を基にすることにした。当書では様々なデザイン、プリーツの作り方、大きさ、素材に対応できるように作り方が紹介されており、多くの選択肢の中から好きなデザインを選んで組み合わせることで作品を制作することが出来るようになってきている。しかし、当日初めてロゼットを制作する参加者が多くの選択肢の中から選べるようにすると、混乱を招いてしまい、作品を完成させることができなくなる可能性がある。それを防ぐため、大きさは作りやすいように1番大きなものに限定し、プリーツの作り方も作りやすい1通りの方法に絞り、その代わりにリボンの種類やモチーフのデコレーションを多くの種類の中から選んで頂くことにより、オリジナリティを出すことができることを目指すことにした。

## 2-3. 材料

材料はリボン、くるみボタン、布、速乾ボンド、接着剤、フェルト、ブローチピン、両面テープ、ビーズやスパンコール等のデコレーションパーツ等を用意した。

ロゼットは型紙、裏面(フェルト)、ブローチピン、モチーフ、プリーツ、テール部分から構成される。モチーフにはくるみボタン、プリーツとテールにはリボンを使用する。型紙はリボンでプリーツを作るときに両面テープを貼って使用するが、参加者の作業時間を短縮するため、あらかじめ両面テープを貼った型紙を用意した。同じく時間短縮のため、くるみボタンにくるむ布は円形に切り抜いたものを、裏面はブローチピンとフェルトをボンドで貼りつけたものを用意し、細かく複雑だと思われる作業は出来るだけ省略するようにした。

参加者がこのワークショップを体験し、気に入った場合にはもう一度作ることができるようにするため、材料は100円ショップで購入できるものなど、身近なものを用意した。

また、参加者がオリジナルのデザインを考えやすいように、そしてスタッフが対応しきれず説明不足であっても見れば作り方が分かるように、参加者に対し、見本を10個作成した。

## 2-4. 新所沢団地さくら祭りでのワークショップ

### 2-4-1. 実施内容

平成28年3月26日のさくら祭りに「秋草学園短期大学によるワークショップ ロゼット作り」として参加し、実施した。参加者の対応は本学文化表現学科1年の3名の学生が行い、参加者は2名ずつ1台の机を使用してカウンター形式で受け付け、参加者1名につき学生1人が対応し、残りの1人は2人の学生の手伝いをするにことにした。さくら祭り自体は13時から17時までであったが、ワークショップの開催時間は13時から15時頃に設定した。初めてのワークショップ参加であり、参加人数や状況が読めない中での実施であったが、58名の参加があった(図4)。

### 2-4-2. 今後の課題

当日は予想以上に参加者が多く、順番待ちで長い列ができてしまった。他の店に迷惑がかかることを避けるため、ワークショップの作業場所を広げ、学生3名に教員2名が加わって参加者の対応に当たった。カウンター形式にしたことで参加者1名に対し、スタッフ1名でしか対応することができなくなり、時間に追われることになってしまった。机を2,3台繋げて広い作業場所を作り、それを取り囲む形での作業にした方が、時間に追われず、スタッフ1名に対し、2～3人の参加者に対応できたと思われる。次回の参考にしたい。

また、当日は晴天であったが風が強く、布や紙、デコレーションパーツなどが風で飛んでしまい、その対応に時間が取られてしまったり、参加者や周囲の方々に手伝って頂く場面があった。作業もしづらい状況であった。屋外でのワークショップでは天候の影響がある場合があるため、材料の置き方等を工夫する必要があることがわかった。

さらに参加者によってはロゼットづくりの工程が難しかったようで、予想以上に時間がかかってしまった。

しかし、58名と多くの方々に参加して下さり、「楽しかった」「また作ってみたい」という声も多く聞くことが出来た。またスタッフとして参加した学生が、忙しい中できぱきと仕事をこなし、しっかりと一人ひとりの参加者に対して責任をもって対応し、生き生きと役割を果たしていたことが、筆者にとっては何よりも嬉しいことであった。特に、参加者の中でも多かった小学生等の子どもへの対応が非常に上手く、驚かされた。会話をしながら飽きやすい子どもたちの気を引き、最後まで作品を完成させており、子どもたちも満足気に見えた。学生にとってこの経験が自信につながり、その自信が今後様々な機会に役立ってくれることを願う。

## 3. リース制作

### 3-1. リースについて

平成28年度の文化表現学科の前期授業に「イベント・プランニング」という授業があった。この授業は「人と人」をつなぐコミュニケーション・メディアとしての役割を持ち、コミュニティ活



動を活性化していくための効果的な手段として注目され、実施されているイベントについて理解し、イベントを企画することによって、アイデアを生み出し、それを説明して提案していく力を身につけることを目指す授業である。その中で新所沢団地自治会のコミュニティサロン「ぐりーんぼけっと」内の季節や行事（イベント）を感じさせる飾りつけとして、七夕リースを制作し、飾らせて頂いた。

リースとは花や葉、木の実などの植物を輪の形につないだ飾りである。リースは古代ギリシャでの「名誉と勝利の冠」<sup>11)</sup>が起源といわれ、オリーブの葉冠は古代オリンピックで優勝した選手に賞品として用いられた。他の競技祭でも月桂樹など様々な葉で作られた冠が授与された。中世の頃、月桂樹は勝利のシンボル、常緑樹は永遠の命を持つと言われ、冬至の夜にドアの入口や窓に飾られており、のちにキリストの降臨を祝うようになった時にクリスマスに常緑樹のリースが飾られるようになったとされている<sup>12)</sup>。

リースの輪状は太陽を象徴するものとして「幸運を呼ぶ」、「永遠に命をつなげる」<sup>13)</sup>、「また戻って来る」という意味をもつようになり、花嫁のブーケの花をリースに作り変えて永遠の記念品にする等、永遠や平和、幸福のシンボルともされ、ヨーロッパでは古くからドアにリースを飾って訪問する人を幸せな気持ちにしたり、相手への気持ちを伝えるものとして、広く親しまれている。

日本ではリースというと、クリスマスのリースの印象が強く、クリスマスの頃になるとリースが飾られるが、欧米ではクリスマスに限らず、各家庭で季節に合わせてリースを飾り、楽しんでいる。飾る場所もドアだけでなく、階段の手すり、リビングの壁、キッチン等に飾られる。日本でも最近では人気があり、各季節に合わせたリースを制作することが多くなっている。そこで、短冊に願い事を書いて笹の葉に飾る一般的な風習とは一風変え、季節感を表現した七夕リースを制作することにした。

### 3-2. 授業での制作方法

授業では実際にリースを飾る場所についての理解を深めるため、新所沢団地自治会のコミュニティサロン「ぐりーんぼけっと」について紹介し、店内の様子を画像で見せた。またリースの意味や最近の使われ方、作り方を説明した。どのようなリースを制作するかイメージしやすいように、笹の葉や朝顔、ひまわりなどの造花、織姫と彦星をイメージさせるもの、吹き流しなどを使った見本を3本制作した。「イベント・プランニング」の履修学生29名を6グループに分け、グループごとに1本、計6本の七夕リースの制作を行った。

### 3-3. 材料

リースの土台、造花（笹の葉、朝顔、ひまわり等）、ハギレ布、余り毛糸、グルーガン、ポンポンメーカーなどを用意した。リース制作においてもコミュニティサロンに飾ったリースを見てくださった方が手軽に作る事が出来ることを考え、100円ショップで購入できるものなど、身近なものを用意した。また、新しい材料を購入せずに、身近にあるもので出来ることを示すため、他の授業での

作品制作時に残ったハギレ布、余り毛糸などを材料とした。余り毛糸は季節感が外れる材料であるため、使い方が難しいと考え、ポンポンを作るためのポンポンメーカーを用意し、作り方を説明したところ、興味をもち使用する学生もいた。リースの土台に貼りつける接着剤としてはグルーガンを使用した。

### 3-4. 制作と飾りつけ、今後の課題

平成 28 年 6 月 13 日と 20 日の「イベント・プランニング」の授業 2 回分を使って七夕リースの制作を行った。学生が七夕とリースのイメージがつかえず、なかなか作業に入れないのではないかと心配したが、見本があったからか、すぐに制作作業に入ることができた。裁縫道具を使って凝ったものを作るグループや、グルーガンの特徴を上手く利用したグループなど、グループによって個性あふれる作品が完成した。グループ内での分担は全体的に上手くいっていたように見えたが、グループごとのモチベーションに差があり、グループごとのフォローの仕方については今後良い方法を探っていきたい。

完成したリースの飾りつけは、「ぐりーんぼけっと」の開店曜日と授業の曜日、履修者数の都合、また授業内容の関連性により、文化表現学科 2 年「ショップ・プレゼンテーション」の 6 月 21 日の授業にて行った（図 5）。

「ぐりーんぼけっと」のお客様の中には、食事をしたり、コーヒー等を飲みながら七夕リースを眺めたり、近くに寄って見ている方もいらっしゃった。リースの作り方に関する質問を受けたり、リースに興味があり、ご自分が今までに作られたリースについて話してくださるお客様、学生が制作した七夕リースを見てアレンジを思いつき、それについて話してくださるお客様も見られた。

この七夕リース制作においては、「ぐりーんぼけっと」の開店曜日と授業曜日の都合により、本学の学生とお客様が直接コミュニケーションをとる機会は少なかつたことが残念である。今後の課題として、「ぐりーんぼけっと」の開店曜日に学生が伺い、お客様や団地住民の方々と一緒に制作を行う、またはリース制作のワークショップを学生が行う等が出来る方法を探っていきたい。しかし、直接コミュニケーションを取る機会は少なかつたが、学生が表現したものにお客様が喜びを感じ、お客様の喜ぶ姿が学生への刺激となり、有意義なものであったと考える。

## おわりに

学生と地域住民交流を目的として、ロゼット作りのワークショップ、コミュニティサロンの飾りつけのための七夕リース制作を行った。ワークショップでは参加者も、スタッフである学生も楽しみながら余裕をもって参加でき、満足感が得られる内容を準備することが大切である。リース制作においては楽しみながら個性を表現し、見る人が満足感を得られるような作品を作る必要がある。今後も互いに楽しみながら満足感の得られるイベントを企画し、実施していきたい。

末筆ながら、ワークショップの参加者の方々に感謝申し上げます。また、このイベントの提案を

快く受け入れ、ご協力頂きました、新所沢団地自治会長古屋俊昭様をはじめ自治会の皆様、同じくご協力頂き、写真を提供して頂きました株式会社 UR リンケージ平野亜紀子様をはじめ株式会社 UR リンケージ関係者様、企画から実施までの様々な面においてご指導頂きました秋草学園短期大学 近喰晴子学長、そしてワークショップにスタッフとして参加してくれた学生、「イベント・ブランニング」の履修学生に感謝申し上げます。

## 註

- 1) 広辞苑 第六版
- 2) 梶原貞幸編著、『イベント・プロフェッショナル I』, 社団法人日本イベント産業振興協会, 2012年, p.8
- 3) 一般社団法人日本イベントプロデュース協会 「イベント憲章」  
<http://www.jepc.com/category/1582679.html>, 2016年10月30日
- 4) 梶原貞幸編著, 前掲書, p.9,
- 5) 一般社団法人日本イベント産業振興協会監修, 『基礎から学ぶ、基礎からわかるイベント』, 一般社団法人日本イベント産業振興協会, 2015年, p.26-p.29
- 6) C.M. キャラシベッタ著, 『フェアチャイルド ファッション辞典』, 鎌倉書房, 1992年, p.468
- 7) 同上, p.121
- 8) WHYTROPHY 著, 『ロゼット リボンの勲章をさがして』, 双葉社, 2015年, p.45
- 9) WHYTROPHY 著, 『ロゼット リボンの勲章をさがして』, 双葉社, 2015年, p.52
- 10) コクボマイカ著, 『縫わずにできる すてきなロゼット』, 河出書房新社, 2014年
- 11) ドアリースプロジェクト, <https://doorwreath.jp/about>, 2016年10月30日
- 12) 甘糟祐加著, 『クリスマスリース』, 株式会社サンリオ, 1990年
- 13) ドアリースプロジェクト, <https://doorwreath.jp/about>, 2016年10月30日

